

銃後史 ノート

復刊7号 通巻10号

いま
女たちの現在を問う会

特集 ◆ 女たちの戦後・その原点



(朝日グラフ46年2月15日号より)

いま
女たちの現在を問う会

銃後史ノート

刊行にあたって

「銃後史ノート」……主として戦後育ちの私たちが、したがってほとんど「戦争」を知らない私たちが、私たちのささやかな機関誌にこんなタイトルを選んだのは、私たちなりの「戦後」があり、その帰結としての「現在」があるからです。「銃後」ということは、主に十五年戦争の過程で頻繁に使われ、女たちに「銃後の護り」を強要しました。しかし、十五年戦争が明治以来の日本の「近代」の集約の姿でもある以上、それは十五年戦争の時期に限らず、日本「近代」を通して女たちにつきまとうことばであると考えます。

私たちは母や祖母たちから、かつての戦争で、犠牲を強いられた被害体験の話が聞かされて育ちました。しかし、成長の過程でその戦争が侵略戦争であったことを知り、戸惑いを持ちつづけてきました。現在も、「銃後」ということばは消滅しても、体制を支える女の状況はかわっていません。この戸惑いと認識の中から、私たちのグループは生まれました。

母たちは確かに戦争の被害者であった。しかし同時に侵略戦争を支える「銃後」の女たちでもあった。何故にそうでしかあり得なかったのか——この機関誌を通じて、これを明らかにしたい、と思えます。そして、それは単に過去の「銃後」の女たちを考えるだけでなく、すでにかつての母たちの年代に達した私たち自身の状況を明らかにするものでありたい、と考えています。

- 生き残った「銃後」の女たちと、生き残った銃後の女たちから育った私たちの対話の場として、
- 「銃後」の女たちになるかもしれない私たち、すでに形をかえてなっているかもしれない私たちを、かつての「銃後の女たち」をみることによって対象化するために、
- 他者、あるいは他国の人々を踏みつけにしない私たちの解放の方向をさぐるために、

このささやかな機関誌をあらしめたいと願っています。

一九七七年十一月一日

特集 ● 女たちの戦後・その原点

年表／敗戦直後の日本—— 4

座談会／窮乏と解放と—— 6

女たちの戦後——その出発点をアンケート六四四人の声にさぐる
加納実紀代—— 44

聞き書き／「米よこせ」から食糧メーデーへ 梅津はぎ子 聞き手・鈴木スム子—— 96

宮城のダシ昆布 潮地 ルミ—— 104

山口判事の死 鈴木スム子—— 108

座談会／教師と生徒が語る敗戦直後の教育—— 116

戦後教育改革は幻か 小園 優子—— 151

日記から——少女の見た戦後・島崎礼子—— 158 笛吹けど踊らず・古浦千穂子—— 185

少国民世代における戦後・森 馨子—— 174 学ぶ楽しさ・尾形ナカ—— 188

手記 青春に悔なし・久保村礼子—— 180 授業ポイコット・市川泰子—— 190

新日本婦人同盟の成立 原田 清子—— 194

婦人代議士誕生——三九人の横顔 佐藤 まや—— 204

民法改正——家制度の廃止をめぐって 植田朱美・香川福子—— 227

女が家を出るとき 久保よし子—— 238

炭坑労働運動を支えた女たち 島村 俊恵—— 258

手記
父親名の当選札状・宮下喜代——225／セキと子供達の家・浅野日出子——250
北京での新婚生活・八坂民子——254／組合結成の頃・丸山美津——267
北海道のヤマで・滝沢たけ子——270／無知の罪・清水文恵——272

九大生体解剖事件の中の女 鈴木スム子——275
連載／戦争と敗戦(II)——出会いのとき 井手 文子——278

墮胎と中絶——優生保護法の成立 大宮みゆき——286

戦争の落し子たち 鶴丸 幸代——310

手記／保健婦としての戦後十年・高橋政子——302／英会話を学ぶオンリーたち・石村滋子——322
資料／街頭録音・ガード下の女たち 構成・鶴丸幸代——326

手記／落ちこぼれ北海道開拓の記 安藤八千代——328

児童雑誌の中の“民主主義” 小原 解子——338

手記／『女性展望』の発刊・尼野胡桃——358／戦中戦後の旅廻り劇団・長谷川喜久代——361
束の間の“民主主義”の中の青春 析折妍子——364

連載／母たちの衣生活(三) むらき数子——370

座談会／『銃後史ノート』十年をふり返って——390

終刊のことば——400

既刊案内 398／本誌取扱店一覧 397／集会のおしらせ 107

児童雑誌の中の「民主主義」

小原解子

子供の教育に対する関心が高まっている。大人たちは、みんな、子供をどうしたものかと考えあぐねている。今の教育が悪い悪いと言いながら、理想の像が見出せない。なのに、政府主導の臨時教育審議会はほとんど地固めをしていき、どうやら、行く先には大きな変化が待ちうけているようだ。子供は子供で学校も、先生も、ましてや「教育」なんて、うっとうしいと思

中心に、大人の子供観を見ていくことにしよう。

1 一九四五年から五〇年に創刊された諸雑誌

い、ため息つきつき、勉強なんぞをしているのではないだろうか。大人の思いと、子供の思いには、かなりのギャップがある。今、この「異様な」教育への関心の高まりを見てみると、大人にとって子供は何なのだろうかという思いにとらわれる。戦後、民主主義が声高に話され、新生日本が叫ばれたころ、大人は子供をどう考えていたのだろうか。民主主義の導入と共に、「子供」という存在を見直すことがなされたのだろうか。そこで、敗戦後、混乱した時期の中で創刊された子供むけの雑誌を

一九四六年三月、児童文学者協会設立。それ以後、子供むけ雑誌の創刊ラッシュが始まる。

学校も、先生も、ましてや「教育」なんて、うっとうしいと思

一九四七年

か。大人の思いと、子供の思いには、かなりのギャップがある。

四月 赤とんぼ (実業之日本社)

今、この「異様な」教育への関心の高まりを見てみると、大人

子供の広場 (新世界社)

人にとって子供は何なのだろうかという思いにとらわれる。戦

五月 童話 (雁書房)

後、民主主義が声高に話され、新生日本が叫ばれたころ、大人

七月 少国民世界

は子供をどう考えていたのだろうか。民主主義の導入と共に、

十月 銀河 (新潮社)

「子供」という存在を見直すことがなされたのだろうか。そこ

十一月 少年

で、敗戦後、混乱した時期の中で創刊された子供むけの雑誌を

一九四七年

一月 ひまわり

童話教室 (柏書房)

六月 子どもの村 (新世界社)

こどもの青空

十月 こどもペン (こどものまど社)

一九四八年

二月 少年少女 (中央公論社)

三月 世界の子供 (世界文学社)

八月 少年画報 (明々社)

一九四九年

一月 冒険王 漫画王 (秋田書店)

少年世界 (ロマンス社)

四月 少年少女譚海 (文京出版)

九月 おもしろブック

これらの中で、いわゆる「戦後の民主的・良心的」^①雑誌と言われるものは、『赤とんぼ』『子供の広場』(のちに『少年少女の広場』と改題)、『銀河』『童話教室』『子どもの村』『こどもペン』『少年少女』『世界の子供』で、一九四六年から四八年に出版されたものに集中している。後述するが、この時期はやや

特異な時期なのである。

『銀河』の編集長は、吉田甲子太郎^{かねたろう}、よく顔を見せる執筆者は、後藤猶根、北畠八穂、椋鳩十、吉野源三郎、百田宗治らで住井すえ子、坪田譲治、平塚武二らも書いている。山本有三が創刊号に書いているが、彼は顧問のような役割をしていたらしい。

『子供の広場』は編集同人として、大久保正太郎、関英雄、菅忠道、瀧沢不二男、来栖良夫、松山文夫の名が挙げられており、編集長は大久保正太郎である。作品募集の際の選者は、童話が小川未明、詩が中野重治、幼年童話が編集部となっている。『子どもの村』は、『子供の広場』と同じ新世界社から出ているもので、対象年齢を『子供の広場』より少し下げている。編集同人は、大久保正太郎、菅忠道、小林純一、清水たみ子、関英雄、斎藤長三。中心執筆陣は、国分一太郎、塚原健二郎、岡本良雄らである。

私は、この三誌にしか、全部目を通すことができなかった。そのため、これらの雑誌を中心に、当時の人々の考えていたことを見ていこうと思う。

2 戦後児童文学にかかわった人々の「戦争中」

これらの執筆者は、いったいどんな人なのか。戦後児童文学

にかかわった人々は、第二次世界大戦、いや大東亜戦争中、何をしていた人なのだろうか。

一九四一年八月、情報局の政府PR誌『週報』には、次のような文章がある。

児童文化の新出発

★日本児童文化協会について

子供のことは、『女子供の世界』と一口に簡単に片づけ勝ちであるが、これは大きな誤りである。(中略)

われわれは人間として一代で終るが、日本民族は、国家は、天壤とともに窮りなく栄えて行くのである。日本民族が、国家が、常に若返つて新しい生命を与へられて行くのは、第二の国民が生長して、われわれの抱いてゐる民族の理想をうけつぎ、実現して行くからである。

従つて、子供こそは国家活動の源泉であり、国の宝であるといへる。この子供達の精神と肉体を強く正しく錬り上げて行くことは、実に国家の盛衰に関する重大な問題である。そしてまた、われわれ日本民族の使命が大東亜共栄圏の確立にある以上、子供を強く正しく育て上げて行くことは、聖戦を完遂するための最も基本的な方策であつて、その意味ではむしろ皇国大作戦の一部ともいへる。

児童文化の問題が非常時日本の大きな課題として現はれ、今回、情報局、文部、内務、厚生、商工等の各省と大政翼賛会が民間有志の人達と協力し、官民一体となつて児童文化育成に乗出した所以もこゝにある。(中略)

また、これらを受け入れる子供の立場から見ると、子供は大人と違つてすべての文化をまんべんなく受け入れて発達するものであるから、片寄つて発達した文化を受け入れることは面白くない結果を齎することは明らかである。また、指導がまちまちであることは、大人の場合は識別する力があるが、子供にはそれだけの力はないから、混乱したものをそのまゝ受け入れる虞れが多分にある。また、文化財としては優れてゐても、子供の生活に対する与へ方が適當でないと、その文化財は眞の価値を発揮せずに終ることが多い。

このやうに指導するものとされるものとの両部門の不統一を強力に一元化しようといふ要望は次第に識者の間に高まつて来た。そして遂に昭和十五年の秋に発足した大政翼賛会によつてとり上げられ、「日本児童文化協会創立準備委員会」が昨年十二月に設けられ、民間から選ばれた児童文化の権威者十氏によつて一応「日本児童文化協会要綱案」が作られた。その後、本協会設立に関する事務は主に情報局が扱ふことになり、同局の幹旋で、文部省を初め厚生、内務、商工の各省、

警視庁等の関係官庁の協議会が七回に亘つて開かれ、要綱案を検討して修正を加へ、去る六月十日、民間側の創立準備委員の参集を求めて、右の正案を十分に審議し、「日本児童文化協会設立要綱案」の最終的な決定を見たのである。②

政府側の意図は、この文章に集約されている。つまり、「国の宝」である子供に対し「指導がまちまちに」ならぬよう、児童文化にかかわる人々の思想を一本化し、教化に努めたい。そのため「組織」が必要だというのである。

「日本児童文化協会設立準備委員」は、民間側は、城戸幡太郎、波多野完治、百田宗治、上村哲弥、藤田圭雄、吉田甲子太郎、滑川道夫、羽仁説子、稲田達雄、武井武雄。官庁側は、井上二郎（情報局）、前田福太郎（商工省）、長野実（厚生省）、阪本越郎（文部省）、佐伯郁郎（内務省）、千賀明（警視庁）だった。このあと、先に引用したような動きがあつて、一九四一年（昭和十六年）十二月二三日、九段の軍人会館で創立大会が開かれた。先のパンフレットでは「日本児童文化協会」となっているが、「児童」という言葉が一般社会に通用しにくいという理由で「日本少国民文化協会」という名称になつたらしい。③

こうして、日本のほとんどの児童文学者達が参加した「日本少国民文化協会」（略して少文協）ができあがつた。少文協結

成にあたっては、各出版社の執筆者名簿から人間を拾いあげ、児童文学者全部を網羅する形で進められたらしい。

一九四三年当時で見ると、吉田甲子太郎は文学部会の庶務幹事、幹事には、石井桃子、小林純一、佐藤義美、巽聖歌、塚原健二郎、滑川道夫、参事には、浜田広介、百田宗治、坪田譲治、相談役には、小川未明、佐藤春夫、豊島与志雄、室生犀星らが名を連ねている。また、絵画部会には、庶務幹事として武井武雄が名を見せている。

出版社の名簿から名が漏れていたせいかわからないが菅忠道は後に入会し、協会囑託に決定。猪野省三は特高につきまといわれて、執筆活動を禁じられていた。国分一太郎は入会しようとしたら、入会拒否されたばかりか、殴打までされたらしい。④

この少文協が児童文学者達を網羅していたということに、総力戦体制のすさまじさを見る思いもするが、戦後活発に活動を行ったメンバーが、全く重なっているということに、私はとまどつてしまう。総力戦体制のもとで、少文協に参加しないことなど考えられなかったのかもしれない、生活のために、書き続けるために、しかたなかったのかもしれない。それにしても：いや、未明の書いていることなどを読んでみると、どうしたつて、すすんで協力したようにしか見えないのだ。

立場を異にせる日本が、世界に声明し、東亜に建設しつつある共栄共存は、根底から幸福の解釈を異にし、内容の同じからざる言を俟たない。即ち道義に立脚して、搾取なく、闘争なき、真の平和なる共栄圏を現出し、新しく光輝ある文化を創造せんがためである。(中略) この時に当つて、私達作家は、顧みて何をなさねばならぬであらうか。(中略) 端的に言へば、民族の解放と共に自己自身の完全な解放が、何より急務でなければならぬのである。いっしか金錢に隷属し、職業意識に囚はれたる自己を反省し、敢然として之を捨て、自由主義時代に感染したる、心の汚辱を一洗して、真に日本精神に生き、国家に殉ずることである。(中略) 芸術家が、その創作の動機を世道人心の興起に置かずとしたならば、一体その作品は何であらうか。(中略)

要は、自由主義時代の慣習、生活様式を繋ぐ、思想、趣味、一切の無形の拘扼を断ち切つて、全く自己の魂を解放し、しかして、生氣潑刺たる少国民と伍し、大東亜を貫く新理念の教化につとむべく、すべからず発足を新にする決意がなければならぬのである。(日本少国民文化協会編『少国民文化論』年刊I 一九四五年・国民図書刊行会)

子供達に

いま、日本が先頭に立つて、暴慢な米英と戦ひ、世界秩序の建直しに邁進してゐることをご存知でせう。もし、さうしなかつたならば、私達のアジア民族は、彼等のために苦しめられて、終には身動きすら出来なくなる運命にあつたのです。さう聞かぬならば皆さんは、齒ざしりをして、早く大きくなつて、お国のためにつくしたいとは考へませんか。(中略) この故に、皆さんは、学ぶにも、遊ぶにも、大理想に燃えつつある日本の子供であること、同じく、人に接し、仕事をなすにも、常に正直であり、やさしくあり、責任感の強き、即ち日本精神の持主であることを忘れてはならぬのであります。(『僕はこれからだ』一九四二年・フタバ書院成光館)

小川未明は、戦中・戦後を通じて児童文学界の大御所だった人である。なぜ大御所だったのかは私などにはちっともわからないが、とにかく、大御所でありつづけた人らしい。彼の戦後の活躍はまたさまざま、今、両者を比べて読むと、こちらはあいた口がふさがらないほどである。この未明と同じことが、ほとんどの児童文学者にも言える。山中恒は、「敗戦後、多くの児童文学作家が雪崩を打つように日本共産党へ入党したといわれるが、そのすべてがマルクスレーニン主義を学習した上で、革命志向を持ったというよりは、恐らくへうしるめたさV

とのかかわりにおいて情動的な素因がはたらいたのではなからうか。」と述べている（『ボクラ少国民 第三部 撃チテ止マム』P6）。そういう側面はたしかにあったらう。けれども私は、それだけではなく、児童文学作家の眼に、実は子供がうつつてなかったのではないかと思う。彼らにとって、子供とはあくまで想像の中のもので、一人の人間として、扱ってない、もしくは、扱う視点が持てなかったのではないかと思う。とにかく、戦後、民主主義をうたって創刊された諸雑誌のメンバーが、ほとんど少文協のメンバーだったこと、決して、いやいやながらに少文協とかかわったのではないことだけ覚えておこう。それでは、戦争中、「大東亜」をうたい続けた人々が、戦後なだれをうたって参加した諸雑誌の内容を見てみよう。

3 雑誌に見られる『民主主義』

まず、それぞれの雑誌の性格を簡単に紹介しておこう。

『銀河』。活字の大きさは、この『銃後史ノート』より少し小さいぐらいで、漢字もふんだんに使っている。作品を批評するコーナーには、女学校三年生、小学校五年生の批評がのせられているので、読者対象は、小学校高学年から中学生あたりといえるだろう。

一九四六年十月号（創刊号）

銀河のはじめに

山本有三

子ジカものがたり

吉田甲子太郎

西遊記（漫画）

提 寒三

十二才の半年

北畠八穂

国際聯合のこと

中野好夫

銀河（科学もの）

白井俊明

パン焼きのノート

オカ・ヨシオ

スウェーデンの少年少女

渡辺紳一郎

心のふえ（連載童話第一回）

松坂忠則

（原文ではカタカナの作者名も漢字にした。又（ ）内は筆者注である）

十一月号

新憲法の話

宮沢俊義

青い黒板（詩）

丸山 薫

西遊記

提 寒三

エーミールと軽わざ師（連載）

エーリッヒ・ケストナー

ある観察

高橋健二・訳
緒方富雄・服部静夫

見かえり物資について

帆足 計

太陽と地球（科学もの）

白井俊明

心のふえ

松坂忠則

十二月号

メジロ

ぼくはハモニカふいていた

エーミールと軽わざ師

変リユク地球

心のふえ

石森延男

サトウ・ハチロー

高橋健二・訳

白井俊明

松坂忠則

第一球

ウイザード博士

地球に生まれた幸福

古典の花ひらく

祖先のうたう日 (連載)

二月号

学者の見当ちがい

ゆめ

ラクダイ横丁

へチマの水 (随筆)

おべんちゃらとでたらめ

科学と人のこころ

雪の山

大流星が落ちてきたら

白いおじさんがやってきた (詩)

セキレイの巣

東洋の夜あけ

石にさく花

三月号

ペートーヴェン (伝記)

にいさんのヒヨコ

水上不二

平塚武二

野尻抱影

三島 一

氏原大作

高橋健二

坪田譲治

岡本良雄

石森延男

木内高音

服部静夫

渋谷秀雄

野尻抱影

江口榛一

猪俣礼二

三島 一

松坂忠則

今井正剛

宮野二郎

初期のものは、社会科学の教材的要素——「国際聯合のこと」

「新憲法の話」「人間のはじまり」「産業のたてなおし」「氷河時

代とその後」「働く者は手をつなぐ」「旧石器時代」などが見ら

れるが、号を重ねるにつれて、小説的な要素がふえはじめる。

一九四八年一月号

こころの女王

ふたりのおばさん

石にさく花 (連載)

けむりのゆくえ

本当のジロー・ブーチン (随筆)

野球とガラガラ (随筆)

ナメトコ山のクマについて (随筆)

ストックホルムの少年少女

吉田甲子太郎

室生犀星

松坂忠則

立花太郎

北畠八穂

岡本良雄

須田浅一郎

斎藤正躬

- | | |
|-------------------------|--------|
| 山びこ集より（児童詩） | 大西 寛 |
| ヤナギの糸 | 壺井 栄 |
| 海の寶石 | 今井正剛 |
| 畑の中の銅像 | 木内高音 |
| きまり、しきたり | 吉田甲子太郎 |
| 童話のもと | 平塚武二 |
| プロメテイウスの火（随筆） | 岡 義雄 |
| 言いわけはいらない | 吉野源三郎 |
| 田んぼと畑 | 福島要一 |
| 石にさく花 | 松坂忠則 |
| 一九四九年八月号（終刊号） | |
| こんにちわ（古橋選手を甲子園プールにたずねて） | |
| 赤い花 | 椋 鳩十 |
| ワンさん | 清水 崑 |
| 黄色い家（探偵小説・連載） | 恵那新吉 |
| ツランのおじいさん | 乾信一郎 |
| ヤギ屋のきょうだい | 壺井 栄 |
| 黄浦江の流れ（連載） | 岡本良雄 |
| ジョン万次郎漂流記 | 井伏鱒二 |
| 山が呼んでいる（詩） | 神保光太郎 |

- | | |
|----------------|-------|
| シベリヤ日記 | 棚沢龍吉 |
| ライオン岩 | 石森延男 |
| 豊中・鳴海・甲子園 | 今井正剛 |
| 浜中湖の豆魚雷 | 辻富士雄 |
| ミッキーマウスが世に出るまで | 長谷川幸雄 |
| ムギをたずねて | 谷 一夫 |

『銀河』の編集長、吉田甲子太郎は言う。

人間は同時に生きている世間ぢゆうの人たちのために、また、あとからうまれてくる世界ぢゆうの人たちのためにできるだけのことをしなければならぬ。（中略）そして、この考えかたこそ「銀河」の理想です。これからの「銀河」は、今までより親しみやすい雑誌にしてゆくつもりですが、この理想だけは常に見うしなわれない覚悟です。

（四七年八・九月合併号）

『銀河』より、もう少し文芸志向の強い『赤とんぼ』の創刊趣旨をのぞいてみよう。

子供たちの世界をいつも美しい豊かな読物でいっぱいにして

おきたい——それはわれわれの常に抱きつづけて来た強い願望であつた。しかし、それも永い戦争と暗黒政治の間には、こと毎に妨害され圧迫されつづけて来た。子供たちは所謂、「ヨイコドモ」になるやうにときびしい梓にはめられ、馬車馬のやうに一つの道を走らされてゐた。今やこの子供たちの肩からその軛を脱し目かくしをとりのぞく時が来た。心豊かな明るい読物を沢山に与へることによつて、こんなに美しい世界があつたのか、こんなにしたのしい場所があつたのかと、思はず大声をあげて喜ぶ子供たちの姿を思ふ時、われわれの心は踊るのである。われわれは何にとらはれることもなく、あらゆる面から、あらゆる階層の人人の協力を得て、子供たちの世界に限りない夢と知識の泉をそそぎかけたいと願つてゐる。どん底に落ちた日本を美と力に満ちた国に作り上げて行かねばならぬ今の子供達に、どちらへもかたよらぬ豊かな情操を養ひ、暖い心と正しい判断力を持った人間にするやうに、あらゆる努力を傾倒したいと思つてゐる。(中略)子を思わぬ親はなく、子孫に期待しない愛国者はあるまい。願はくはすべての有志の方々の協力によつてこの仕事を今のわれわれの為し得る最上の贈物としてわれわれの後継者の手に捧げた

い。〔赤とんぼ〕四六年四月号)

言葉はやわらかく、子供を思う気持ちにあふれているのはよくわかる。けれども、時々顔をだす「あるべき子供」に強制しようという意識は何なのだろう。「どん底に落ちた日本を美と力に満ちた国に作り上げて行かねばならぬ今の子供達」とは何ごとだろう。子供にとってみれば、迷惑きわまりない話だ。私だって、「大人が勝手にしてきたことじゃないか。オトシマエは自分でつける」と言いたくなる。子供のことを考える、思う、などと言いながら、思っている内容も思い方もちがうのだ、この本をつくっている人達は。

『赤とんぼ』創刊号の目次だけあげておこう。著者は、また例のごとく、少文協の代表的メンバーである。

一九四六年四月号(創刊号)

椎の木

豊島与志雄

田園都市

青木 茂

冬の朝

木内高音

雪を消す話

中谷宇吉郎

どんど焼

藤田圭雄

本のさし絵

緒方富雄

飛ぶ教室

エーリック・ケストナー
高橋健二・訳

ついでに述べておくと、有名な「ビルマの堅琴」は、この『赤とんぼ』に一九四七年三月から四八年二月まで連載されたもの。また「ジロー・ブーチン日記」は『銀河』に一九四七年一月から十二月まで連載されたものである。また、『ノンちゃん雲に乗る』は、一九四七年二月に、大地書房から出版されている。ほとんど、同時期である。

『子供の広場』の創刊の辞は、もっとはっきりしている。

「子供の広場」は諸君の広場だ。諸君が自由に集つて、勉強し、議論をたたかかせ、計画をたて、実行を進める楽しい広場だ。ほんたうのことをまなび、物事を根本から考へる力をねり、文化を、平和を、人類を愛する心をきたへる明るい広場だ。全日本の少年少女諸君、子供は子供で、しつかり腕をくまう。

さうして、どんな困難でも乗りきつて、文化の国、平和の国、民主日本をつくりあげよう。

(『子供の広場』一九四六年四月号)

一九四六年四月号(創刊号)

世界は一つに(評論)

松本慎一

コーリヤとめんどり

石川啄木

貨車と赤牛

種のふしぎ(科学もの)

兄の声

弘君

子供壁新聞

五月号

驟雨

君たちの力

アンデルセン

月はなぜ落ちないか(科学もの)

みんなでたべるとおいしいな(ローマ字)

ピオの話

牛ぬすつと

子供ペンクラブ

十月号

とくしう・憲法のはなし

手まりうた(詩)

日本歴史えものがたり

キャッチボール(ローマ字)

山村房次

渡辺順三

与田準一

浪江 虔

小川未明

上林 暁

松葉重庸

山村暮鳥

細川嘉六

関 英雄

稲沼瑞穂

奈街三郎

藤森成吉

宮原無花樹

国分一太郎

本田喜代治

与田準一

伊豆公夫・松山文雄

百田宗治

いろいろな力の話

島崎藤村

えんとつそうじ小僧

秋のひと夜

神の子あくまの子

コドモ・読書クラブ

ファラデー

塚原健二郎

アナトール・フランス

河合享・訳

小田嶽夫

間宮茂輔

滑川道夫

全体を通して目立つのは、『新憲法』や『民主主義』についての話が多いことで、「日本歴史えものがたり」では、日本の歴史を、原始時代から説きおこしている。戦争中の教育を考えれば、たしかに「ほんたうのことをまなび」という創刊趣旨が生かされていると言えよう。この『子供の広場』は小学校五、六年生向で、新世界社では、この他に『コドモノハタ』という月刊えほん、『子どもの村』という、小学校二、三、四年生むけの雑誌を出している。

『子供の広場』も『子どもの村』も創刊趣旨は似たようなもので、「文化の国、平和の国、民主日本をつくりあげる」国民をつくりあげることである。「赤とんぼ」の創刊言で見たのと同じように、さまざまな大人からの思いをこめたメッセージが児童文学という形で、児童図書という形で結実したのだといえる。これらの雑誌の創刊のことばを読んでいると、先に引用し

た、少文協のPRの文章と酷似していることに気がつく。強制された思想善導でなく、本気で信じこみ、子供達に民主主義を担わせようという意識が見える。自らが信じていることをがっぱり子供の肩の上におしつけたような、重苦しささえ感じてしまう。これは、雑誌の方針だけでなく、作品についても言えることなのだが。

引用した目次の中にも出ていたが、『子供の広場』では、さかんに、子供壁新聞、子供ペンクラブ、子供会、子供読書クラブをつくらうというよびかけをしている。

子供会をつくらう！

松葉先生の「子供壁新聞」を読んで、みなさんも子供会をつくつてみたいとおもひませんか。

「子供の広場」の読者は、友だち同志さそひあつてみんな子供会をつくらう。子供会にはいらう。子供会は、子供のつくる会だ。みんなで、なかよくたすけあつて、勉強したり、仕事をしたり、あそんだりする会だ。そして、みんなで「子供の広場」を読みあつて、正しいほんたうのことを勉強するやうにしよう。みんなで、民主主義の日本を明かるく、美しく、ゆたかな国にしてゆかう。

子供会のできてゐるところ、できかかつてゐるところでは、

「子供の広場」へ、どしどしレポートを送らう。「子供の広場」をみんなで読んだら、感想や注文を、ゑんりよなく書いて送らう。

りっぱな子供会については、本社でしらべて「子供の広場」に紹介し、記念品をさしあげます。

(「子供の広場」四六年四月号)

このような誘いかけに、子供たちは、けなげに答えてくる。

子供の広場をよんでまことにかんしんしました。したい友達ち二三人にうちあけますと(僕の心を)友だちも、うんそれならといつて、「コドモ」という新聞を作りました。この新聞は紙がないので、紙のあるときだけつくります。だから週刊か月刊か日刊だかわかりませんしかしだんだん友達があつまつて、いまはにぎやかです。どうかもとよい僕たちにおうようできる紙芝居などの記事ものせて下さい。

ではまた、「子供の広場」がりっぱになることをいのります。さよなら(静岡縣賀茂郡南上村國民学校初五 植村桂)

(四七年一月号)

この文章は、本当に子供からの投書なのかどうか、うさなく

さい気もするが、ヤラセなら、なおさら、この本の性格ははっきりすると言えるだろう。どうも、ある考え方を大人の側がさかんに鼓吹しておいて、子供の側がそれに応えているという形で、コトを進めるのも、少文協のやり方と同じようだ。

けれども、もっと素朴に、これらの雑誌に目を通してみて思うのは、書かれていることが、本当に子供にわかったのかということである。雑誌の対象年齢を気にしたのも、このせいだ。「民主主義」とか「新憲法」「ギロン」「組合」「ソウギ」など、もう、ありとあらゆるところに、生硬な一人歩きしている言葉が見られるのである。

「東京って、まるで、スリやどろぼうで、いっぱいみたいですねえ。」と、ケンジは、そのポスターをみて、言いました。「ははは。ほんとだね。」と、わらいながら、「でも、そんな小さなスリやコンどろより、もっと大きな、大どろぼうがいるから、よほど、しっかりしなければ、東京では、くらしでいけないよ。」と、おじさんがいました。

(中略)

「そんな大どろぼうって、ごとうのこと？」と、タダン君も、びっくりしたような顔できました。

「いいや、大どろぼうって、そんな、ごうとうのように、ま
ずいことはしないよ。もっと、じょうずに、——女王ばちが、
じっとねていて、はたらきばちの、あつめてきた蜜を、とっ
てしまうように、ひとはたらきで、大もうけをしているの
さ。」

「えッ、そんな、ずるいのがいるんですか。」とケンジはおど
ろきました。

「このあたりに出ている露店のおやかたがそうだし、おじさ
んたちのいく、会社の社長なんていうのも、たいてい、そう
だ。ひとにはたらかせて、じぶんは、あそんでいて、大もう
けをする、大どろぼうさ。」

「じゃあ、どうして、おまわりさんは、そんな大どろぼうを、
つかまえないのですか。」

「それは、そいつらは、法律のうえのつみにならないよう、
うまく、やっているからさ。それに、もともと、法律が、そ
いつらにつごうのいいように、できているんだよ。だから、
おまわりさんは、とりしまるところか、そいつらのすんでい
る大きな家へ、コソどろがはいらないよう、とくべつに、ま
もっているくらいなんだ。」

「ちえっ。」と、いって、タダシ君もおこったようでした。

(中略)

「いじめられてるものどおしが、しっかりちからをあわせて、
大どろぼうを やっつけるのだ、ねえ。」と、このとき、タ
ダシ君が、こういって、ケンジの手をにぎりました。「うん。」
と、いって、ケンジも、その手をにぎりかえしました。

(四七年十一月号『子どもの村』)

「どろぼうはどこにいるのか」岡本良雄

資本家や地主がリジユンや地代をたくさんとれば、労働者や
農民のとる分がすくなくなる。はんたいに、労働者や農民が
よけいとれば、資本家や地主のふところへはいる分がすくな
くなる。この分けまへ、取り分の問題で、この二種類の人々
は、たがひにあらそふやうな立場にあるのです。資本家と労
働者とのあひだに、地主と小作人とのあひだに、しよつちゆ
うあらそひがおこるのは、このためです。

(中略)

労働者がダンケツすれば、資本家もいままでのやうにむり
はいへなくなります。チンギンのことでも、はたらく時間の
ことでも、なるべく労働者のいひ分をいれようします。さ
うしないと、労働者はストライキなどをやるから、資本家は
損をします。

この労働者のダンケツが労働組合なのです。

(中略)

一口でいふと、日本が民主主義国家に生まれかほるやうになつたことが、労働組合のさかんになつた、一ばんもとの理由です。民主主義の大きな目的のひとつは、国民の大部分である勤労者の生活をひきあげ、政治の上でも経済の上でも、勤労者の地位を大きく改善することでもあります。民主主義の国では、だから、たうぜん労働組合がさかんになるはずなのです。

(四六年七・八月合併号『子供の広場』「はたらく人々・

はたらかぬ人々」松本慎一)

これが、小学生に理解できる文章なのだろうか。よしんば、読みこなせたとしても、実感として受けとめることができるだろうか。子供の実感として受けとめられるように配慮したのか、親(ほとんど父親)が組合活動するようになったのを見て、子供が「これはよいことなんだ」と考える物語も多く出てくる。「ぬすまれた自転車」(四七年十二月号『子供の広場』猪野省三作)が、その代表といえよう。

これらの作品は、どれをとっても、総力戦体制下では絶対に出版を許されなかったものであり、書くことすら命がけのものだったとは言えよう。しかし、思想の方向性、見ようとする日

本の理想像が違うだけで、日本を大日本帝国に、民主主義を、アジアの解放、大東亜の建設におきかえることだってできるのである。少文協時代の文章と、めざす目的こそ違っても、子どもにとらえ方の、なんと似ていることか。子供にわかってもらえるのかという心配より、まず「言いたい」、そして、子供は理解できなければいけないのである。また、理解できるまで、勉強しなければいけないのである。

4 当時の子供達の状況

児童文学作家たちが、もろ手をあげて、戦後民主主義万歳、日本の子供たち万歳」と叫んでいた頃、当の子供達は、とても民主主義のことなど考えているヒマはなかった。

「いも電車」の異名をとった東上線は志木から川越の奥まで買い出しに出かける人でいっぱいだった。子どもも買い出しに出された。小学校も高学年ともなると、一〇キロ前後のいもを背負わされた。そのためクラスにはいつも一人〜二人は学校を休んで買い出しに行く学童がいた。

(東京都板橋区編『わが街・いまむかし』一九八三年)

食料不足に陥った敗戦直後。その中で、子供たちも直面する

食、から逃げ出せようはずもなく、とにかく、生きるため
の努力をせい一杯しなくてはならなかった。買出しにせいを出
せたのは良い方で、疎開先から帰ってきたら家が焼けて、両親
とも亡くなっていたり、空襲で両親と別れて身寄りもなく、浮
浪児となって街をさまよう子供達の数は急速にふえていく。

一九四六年四月十六日の朝日新聞には、上野の二〇〇人を筆
頭に帝都全体で浮浪児は三五〇余人はいるだろうとし、多くは
十歳前後で、遠くは青森、鹿児島からやってきた子供たちもい
るといふ。駅付近に多くいるのは、オニギリがすぐもらえる
という理由かららしい。又、全国で浮浪児を保護しようと、委員
会や案内所の設置も検討されている。(四六年四月二九日、朝
日)。

「児童が集団で倉庫破り」(西日本新聞 四六年四月十七日)
とか、「『悪の華』は誰が咲かせた? 十三萬円を稼いだ少年五
人組窃盗」(四六年九月五日朝日) などという記事があらこ
ちらに見られる。都下青少年犯罪は、一九四六年七月で、一九五
九件、八月には二千件突破といわれ、このうち約四割は十八歳
未満だといふ。一九四七年五月十日、十五日には、箱根で孤児
援護協議会が開かれ、孤児收容所長二〇〇名が集まっている。
(四七年五月十一日朝日)。また、五月十八日には、東京芝の日
赤本社で、全国児童福祉大会が開かれ、皇后が、孤児を幸福に

したい」と語っている。

これらの浮浪児は、両親があっても生計困難なもの、片親の
ものは父が病氣だったり、收容所脱走をしていたりするらしい。
子供達は、なかなか生活力旺盛で、くつみがきをしたり、二二
銭で仕入れた新聞を五〇銭、一円で売ったり、「モーケル」こ
とをちゃんと知っていた(四七年五月二一日朝日)。またそう
いう正当な報酬ではなく、置き引き、かっぱらい、スリ常習や
パンパンの客引きをするものやら、取締る方も頭を悩ませたよ
うだ。こういった、たくましい子供達とは別に、心中に巻きぞ
えにされた例も少なくないし、親がいても捨てられる赤ちゃん
は、あとを断たない。とにかく食料がないのである。余裕のあ
る人に赤ちゃんをわたすか、一緒に死ぬか、という状態の人が
たくさんいたのだ。

時代の雰囲気を感じていると思うので、少し引用してみよう。

救はれる戦災孤児

福岡第一師範の高木君は今回福一光会を結成、同志八名と
戦災孤児の救済事業に挺身してゐるが、彼は昨秋復員兵とし
て帰還、母国の港に上陸第一歩、彼の腕にすがつたのは可憐
な戦災孤児の物乞ふ姿だったといふ、その瞬間、教育者とし
て理想と抱負を抱いてゐたかつての師範生だった彼は、この

表 1

子供の広場			銀 河			子どもの村		
月 号	ページ数	定価	月 号	ページ数	定価	月 号	ページ数	定価
1946		円			円			円
4(創刊)	64	3						
5	64	3						
6	64	3						
7・8(合併)	96	4.5						
10	96	4.5						
11・12(合併)	96	5						
1947			1947					
1	112	6	3		8			
4	64	9	4	72	12	1947		
6	48	12	5	52	8	6(創刊)	52	15
7	48	12	6	42	10	8	44	15
8	48	12	7	42	12	9	44	15
10	48	15	8・9(合併)	48	12	10	48	18
11	60	17	10	40	12	11	48	18
12	64	17	11	64	18	12	56	18

孤児達を救い上げずして敗戦国の学徒として生きる道はないことを痛感。(中略) 戦災孤児の救済といふことはいままでどの孤児院にもないことで、すでに各地では収容したもののほとんどが脱走するといふ失敗ぶりである。(中略) 高木君の語るところによると一人病気で寝込んである孤児に対し、みんな何かと親切に世話してゐる、貰ひの多い児は他の者に分配してやる、なかなか仁義にあつらしい。(中略) はじめは無理に一定の生活様式に入れることはしない、ただ伝書鳩式に寝る巣と食物をあてがってやる、孤児達の習癖となつてゐる浮浪性は当分認めてやる極く自由に取扱ふ、すると丈夫な連中は薪割の手伝ひでも炊事の手伝ひでもやる……つまり、まづ働くことの面白さを自然と納得させるのだ。(四六年四月十五日西日本)

子供達がこのような状態であり、親も、食うことで精一杯のこの時、いったいどんな人が「銀河」や「子供の広場」を買ったのだろう。それぞれの値段は表1のとおりである。

当時のヤミ市の物価は、一九四六年二月で、リンゴ二個十円、ふかしいも一個一円、大根一本八円。米一キロは三四、四七円。

		1945年	1946年	1947年
公務員 初任給 (大卒)			460	1164 ↓ 1310
米 1 キロ	公 定 値	0.377	1.95 ↓ 3.625	9.97 ↓ 14.96
	闇 値	12.25	34.47	67.21
タ バ コ 1 箱		7	10 ↓ 20	30 ↓ 50
映 画		0.95 ↓ 1.5	4.5	10 ↓ 20
理 髪		3.5	5.0	10 ↓ 15
銭 湯		0.12 ↓ 0.20	0.2 ↓ 0.9	1.3 ↓ 4.0
市 電		0.1 ↓ 0.2	0.4	0.5 ↓ 2.0
列 車 (東 京 ~ 大 阪)		15.5	36	155
は が き		0.03 ↓ 0.05	0.15	0.5
新 聞 (月 ぎ め)		1.6 ↓ 2.7	5 ↓ 8	12.5 ↓ 20.0

一九四六年の家計調査では、京都の一四六七円七〇銭が支出平均の最高で、都会地のエンゲル係数は七〇を超えている。同年、大卒の公務員の初任給は四六〇円、諸物価は表2を参照してほしい。

そんな時に、いったい誰が八円も十五円もする本を買っただろう。「子供の広場」一冊で、ふかしいもが九個、大根が一本買ったのである。時々、雑誌を買うことはあっても、定期購読していたとは考えにくい。そのような状況に対し、未明は次のように語る。

いかえれば時代を反映して悪がしこくなり、今までの子供らしさを失っているものが多い。

子供は純情と一口でいうけれど、それは畢竟どうにでも感化されるという意味に他ならぬ。(中略)

今日のこうした荒んだ状態から、子供たちを救うものは、何んと言っても指導者の誠実であり情熱である。時代に迎合するというよりは、直面した現実新しい自己というものを発見して、子供たちと共に新しい日本を建設して行くという誠実がなくてはならぬ。

〔『日本児童文学』四六年九月創刊号「子供たちへの責任」

小川未明〕

最近小さな子供の行状などを見ていると胸をうたれる。言

あいた口がふさがらないとはこのことだが、こんな大人に見こまれた子供は、本当に迷惑だ。彼にとって大切なのは「子供らしさ」であり、「子供はどのようにでも感化される」ものなのである。この未明の視点からは、子供のおかれた状況、子供たちが本当に欲しているものへ切りこもうという視点がすっぱりぬけおちている。実際の子供は食べることに窮しているのに、作家は「新生日本」「民主主義」をうたい、作品の中に登場する子供たちは、おなかをすかせもせず、明日の日本について本気で考えるのである。これはまるで「欲シガリマセン勝ツマデハ」と同じではないか。本の値段もさることながら、これらの本は結局のところ、子供達にとって魅力あるものとなりえなかった。『銀河』には、次のような編集後記がある。

みなさんへ

先日、子どもの編集部で、この雑誌のていさいや内容についていろいろな感想を、全国のおもな小学校の先生や読者のみなさんから、ひろく寄せていただきました。(中略) その結果、おとなの人のと少年少女のとはかなり答え方がちがっていました。(中略) 私たちは、みなさんに喜ばれ、同時にまたみなさんのためになる(従って先生や父兄に賛成してもらえ)本をつくらうと心がけてきたからです。(中

略) 銀河もみなさんから愛されるといふ第一条件のほかにはみなさんの生長のたすけをするという仕事も、当然加えられてきたわけです。(中略) 私たちは今、こんなことではいけないと思つて、新しく心をふるいおこしています。もっともつとみなさんから喜んでもらえる本をつくりましょう。そして楽しいこととよいことを、本当にひとつのものにした本にしていきましょう。また、みなさんも、私たちが心をこめてつとめている「生長のたすけになる」といふ仕事のあらわれを、堅ぐるしがたりありがためいわくに考えずに、進んで、「それを自分も望んでいたのだ」という自発的な奮発心で、もっともつとこのびのび迎えいれてください。

(一九四七年四月号『銀河』)

ここに端的にあらわれているのは、「ためになるので良い」とした大人と、「つまらない」とした子供の存在だ。さもありません。心をふるいたたせてくれる物語も、共感できる物語も、そこにはないのだから。再三言うようだが、「ありがためいわくがらずに…すすんで…迎えいれていってください」に、雑誌の性格が象徴されている。何といおうと、子供には「ありがためいわく」なのである。それを、はっきり「ありがためいわくだ」と言つて拒否できるように、やっとなつたばかりではない

か。

一九四九年八月『銀河』廃刊、九月『世界の子供』廃刊、ついで一九五〇年三月『少年少女の広場』、四月『子どもの村』廃刊、十二月『少年少女』終刊。

当時は漫性的な紙不足だが、一九四六年、四七年に出版できたものが、五〇年になって、紙不足のため廃刊とは考えにくい。山中恒はこの時期を次のように語る。

今にして思えば、その出版界の隆盛現象もまた、戦時下の出版の△不自由▽からの取戻しであり、人々もまた出版物そのものに飢えてもいた。だから、一時は「印刷してある紙でさえあれば何でも売れる」という乱暴な言い方ができるような、過渡的現象に支えられていたに過ぎないとも言える。それに、もともと、児童図書が売れるといっても、一般書にくらべたら微々たるものであった。したがって、その過渡的現象が鎮静すると停滞が始まった。^⑤

滑川道夫らは、一九五〇年におこった朝鮮戦争を境に、戦後民主主義のかげにかくれていたものがあらわれはじめ、いわゆる「逆コース」がはじまって、その反動化現象によって、良心的、民主的児童文学がつぶされたのだと考えているらしい。そ

して、その結果、低俗なマンガや娯楽雑誌がハバをきかせはじめたというのである。

たしかに、朝鮮戦争等の影響もあっただろう。けれども、子供から見はなされたというのが、素直な見方ではないだろうか。

5 子供はまっ白なカンヴァスか

私は思う。戦争中の少国民文化が大政翼賛であったのと同じように、一九四六年から五〇年にかけての児童文学も「翼賛型民主主義」なのだ。新しく導入された民主主義の概念に飛びつき、これこそが唯一無二の素晴らしい考え方だと子供達にくり返し説いた雑誌は、子供が本当にどう生きたいと思っているのか、何をしたいと思っているのかに応えようとしただろうか。

子供にむかって、「どんな国民になってほしいか」ということで、自分達がしてきたことのツケを解消しようとしただけではなかったか。大人にとって子供は「素材」でしかなかったのである。たしかに状況に対する批判や、正しい歴史を教えようとする姿勢などさまざまな試みを、諸雑誌の中に見ることができる。それに、これらの雑誌に満ち満ちている希望とバイタリティーに今も学ぶところは多い。

思えば、敗戦直後の雑誌はしあわせだった。食べることに生きること、平和と民主主義を実現することが密接に結びつい

ていたのだから。「目的」と「理想」があるというのは、なんとすばらしいことなのだろう。けれど、その「目的」と「理想」が、もっと生の子供に向けられていたなら――。

子供は「訓育するべきもの」でもなければ「善導するべきもの」でもない。状況の中で生きる一人の個性を持った人間だ。大人と同じ一つの人格だ。子供はまっ白なカンヴァスではない。ましてや、色を重ねていくのは大人ではない。大人が子供に、**「素材、意識を持ち続ける限り、大人対子供の葛藤は続くだろう。問題は、大人がそう考えているなんて思ってもおらず、いつも「子供のことを考えている」と勘違いしている点にある。」**そして、その問題は今もなお存在している。今はただ、民主主義にかわるべき理想が、目的が見えないぶん、大人の側が混乱しているのだ。

「戦後民主主義」って、いったい何だったのだろう。もう一度、何度説明されてもよくわからない「民主主義」を考えなおす必要があるのではないか。「民主主義」という言葉をまるごとのみこむのではなく、かみくだいて、その中でどう生きるのかを自らに問いなおす必要が。今度こそは、大人自身が、自分の生きているさまを、あらいざらいぶちまけて子供達に見せるところからはじめなくてはいけないのだと思う。私達は、子供に何かを要求するまえに、自分がまっすぐに立っているかどうかを、確かめる必要がある。

ウソについても平気な政治家と、根まわしだけがハバをきかせる組織はもうそれだけで、子供のことを云々する資格はない。

△資料▽

- ① 『児童文学への招待』 P 99 (鳥越信・風濤社)
- ② 『ボクラ少年国民第三部 撃チテシ止マム』
P 17 ～ 20より再引用 (山中恒・辺境社)
- ③ 前掲書 P 17 ～ 71
- ④ 前掲書 P 121
- ⑤ 前掲書 P 7

